2017年4月

2017年「日本建築学会賞（論文）」受賞業績の紹介

# 「わが国の住宅の近代化に関する一連の歴史研究」

-Studies on the History of Modernization in Japanese Housing-

内田青蔵（神奈川大学工学部
建築学科・教授）

# １．研究の概要

内田の一連の研究は、それまでの近代日本住宅の歴史研究で表層的影響と軽視されてきた“洋風化”現象に焦点を据え、明治以降の住宅の変容過程を論じたものである。すなわち、明治期の住宅の洋風化の動きとして、上流層の住宅にみられる洋館建設の動きとその影響を受けた中流層の住宅動向を明らかにしている。大正期以降の動向に関しては、住宅の洋風化をめざした住宅改良運動を牽引した「住宅改良会」の活動内容とその運動のもとでめざされた住宅像を明らかにしている。また、明治末期に創設し、アメリカ住宅の輸入販売から設計施工会社へと変貌を遂げた「あめりか屋」の住宅の特徴を明らかにしている。そして、こうした研究成果をもとに、日本住宅の洋風化の過程には、伝統的住宅に洋風要素を採り入れ洋風化していく住宅とともに、欧米住宅に和風要素を採り入れながら日本化した住宅というもうひとつの系譜があることを示し、後者を「洋風系独立住宅」と称すべきことを提唱している。いずれにせよ、洋風化は衣食住の分野はもとより様々な分野にみられる現象であり、それゆえ、洋風化に主軸を据えるという視点は、住宅の様式論とは異なり隣接する研究領域との交流を可能とするなど近代日本住宅史研究の発展に大きく寄与している。

**英文概要:**

Uchida's research focuses on historical studies of modern Japanese housing, discussing the process of transformation of housing from the Meiji period onwards, with a focus on the phenomenon of *yōfūka* (becoming Western-style) that was previously viewed as having only superficial influence.

With regard to movement towards *yōfūka* in Meiji period housing, Uchida has shown that this can be seen in the construction of Western-style mansions and villas by the upper class as well as in the housing preferences of the middle class who were influenced by the upper class trends. From the Taisho period onwards, it is clear what image of housing was being aimed at through analysis of the efforts of the *Jūtaku Kairyō-kai* (Housing Improvement Association) who led the movement of housing improvement that included *yōfūka* of housing. Also, Uchida's research has highlighted the characteristics of housing built by the "Amerika-ya" company, which was established in the late Meiji period and achieved a metamorphosis from an importer of American-style

housing to becoming an architectural design firm in its own right. Based on the results of this research, Uchida showed that along with the inclusion of Western-style elements in the process of *yōfūka* in Japanese housing, there is a separate lineage of housing whereby the inclusion of Japanese-style elements in Western housing that sees a process of *yōfūka* (becoming Japanese-style) and suggested that the latter should be known as "Western-style standalone housing".

This *yōfūka* is a phenomenon that can be seen in a variety of fields not limited to architecture and Uchida's perspective of placing *yōfūka* as the central axis has provided a great contribution to the development of research into the history of modern Japanese housing by suggesting an approach that is different from the traditional *yōshikiron* that focuses on architectural style and is therefore full of jargon that only architects understand. *Yōfūka* can therefore be used as a focal point for exchange with researchers of various fields.

# ２．軽視されていた「洋風化」現象を主軸とした新たな近代日本住宅史の展開

## A:「住宅改良会」に関する研究

「住宅改良会」の存在自体は既に知られていたが、その活動は「洋風化」として軽視され、その実体は明らかにされてはいなかった。

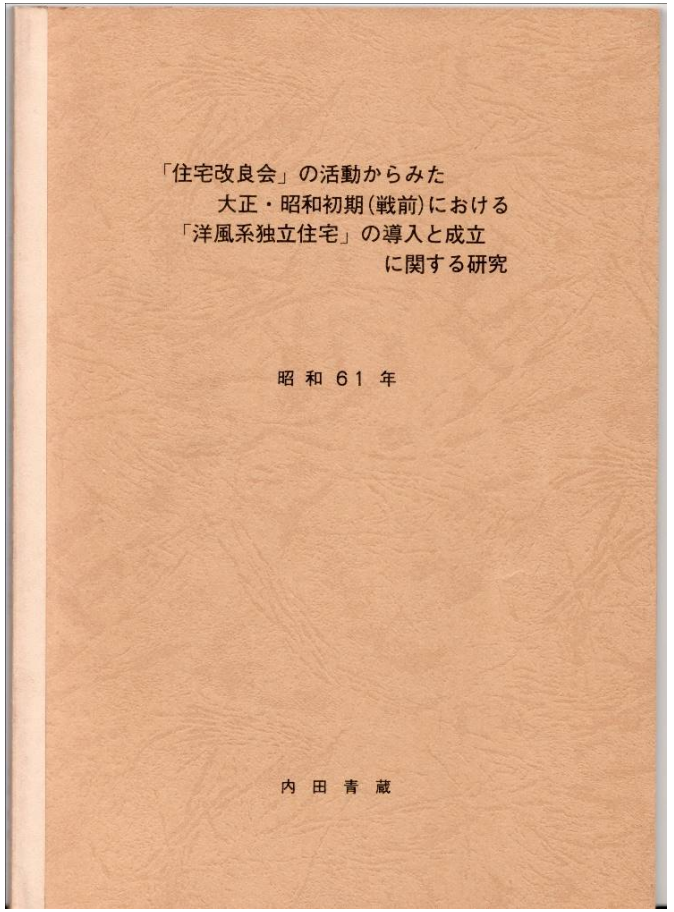
「住宅改良会」に関する主論文は以下の3編

拙稿:「住宅改良会」の設立について　論文報告集第345号　昭和59年11月

拙稿:「住宅改良会」の沿革と事業内容について　論文報告集第351号　昭和60年5月

拙稿:住宅設計競技入選案から見た「住宅改良会」の住宅像について　論文報告集第358号　昭和60年12月

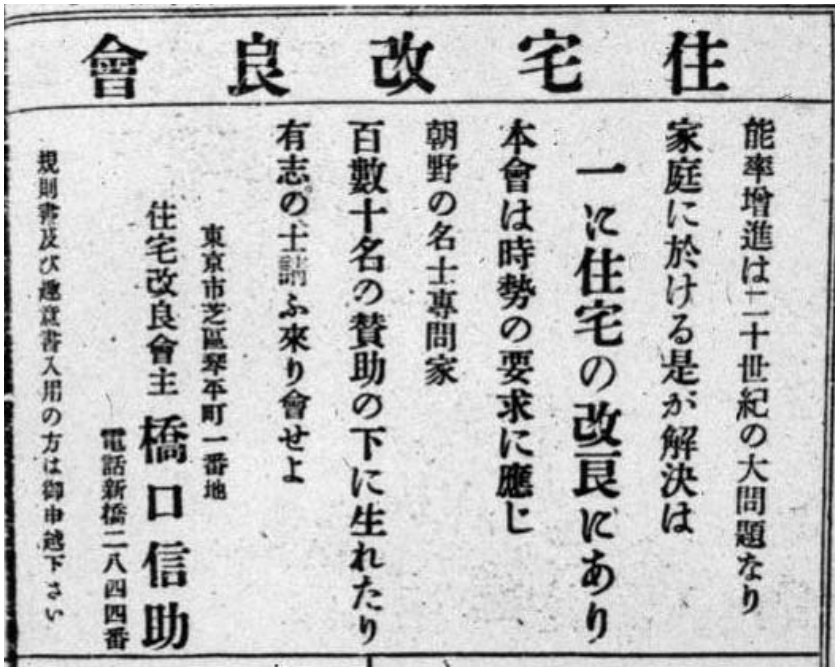
➡3編の論文を中心とした学位論文



# ●「住宅改良会」の設立経緯

・大正5年に「あめりか屋」店主橋口信助と女子教育家三角錫子の協力により創立。

『婦人之友』(大正5年)誌上で会員を募集


住宅改良會

能率増進は二十世紀の大問題なり
家庭に於ける是が解決は
一に住宅の改良にあり
本會は時勢の要求に應じ
朝野の名士專門家
百數十名の贊助の下に生れたり
有志の士請ふ來り會せよ

東京市芝區琴平町一番地
住宅改良會主 橋口信助
電話新橋二八四四番

規則書及び趣意書入用の方は御申越下さい

橋口信助

➡＜生活を改善する為には、まず生活の器である住まいを変えることが必要＞　と主張

大正5年：8月から機関誌『住宅』を発行

➡橋口は、アメリカで主婦向けに出版されていた『HOUSE＆GARDEN』を手本に住宅の啓蒙化を開始

三角錫子

# ●住宅改良会の主な活動

## ①機関誌『住宅』の発行

➡わが国最初期の住宅専門雑誌（大正5年8月創刊、廃刊は昭和18年12月号）

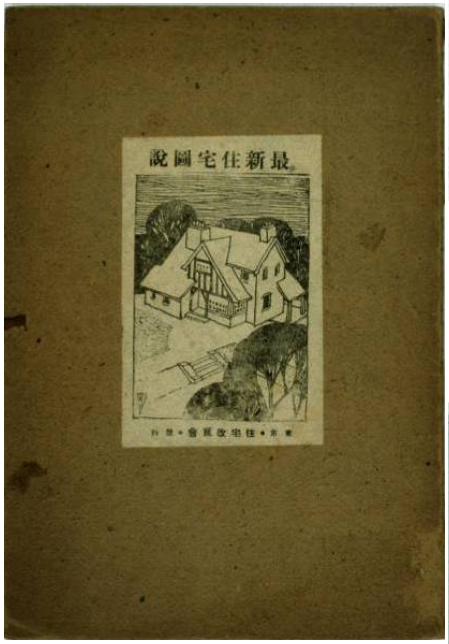
住宅改良会

機関誌『住宅』創刊号

：大正5年8月

## ②住宅の設計競技の開催

➡住宅設計の課題を一般の人々に問いかけることによる住宅啓蒙活動の継続

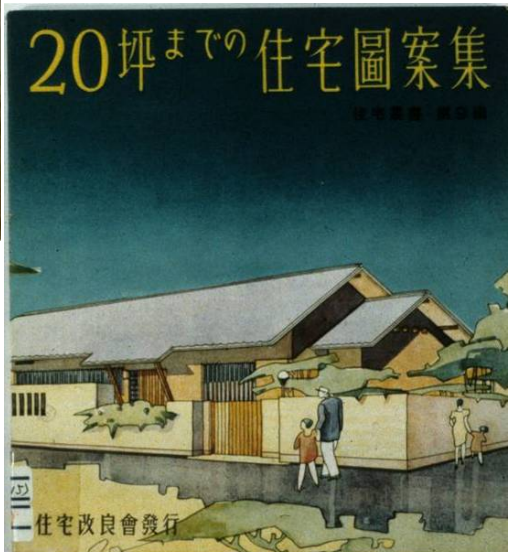



住宅改良会発行の住宅関連図書『最新住宅図説』：大正８年

## ③住宅関連図書の出版

➡住宅の啓蒙活動ならびに住宅の図面集などを刊行

設計競技の入選案をまとめて刊行した。『20坪までの住宅図案集』：昭和15年



# ●設計競技案からみる「住宅改良会」の住宅像

椅子座式と床座式という二つの起居様式から成る住宅の意匠を見ていくと、

外部の意匠：大壁仕上による「洋風住宅」で、洋風志向の一貫性が窺われる。

内部諸室の意匠：「洋室：椅子座式、板敷・平天井・大壁・上げ下げ窓」、和室：床座式、畳敷・竿縁天井・真壁・引違い窓」が混在

➡昭和3年-昭和8年を境に、窓形式は洋室に引違い形式となるなどの「和風」化が見られる ＜「純洋風」から「洋風」への変化＞

こうした住宅形式は、従来提唱されてきた在来住宅を基本として欧米の影響を受けて生み出されたものとは異なり、直接欧米住宅を基本として徐々に「和風」要素を採り入れながら生み出されたものと考えられ、「洋風系独立住宅」と称すべきことを提唱している。

# B:「あめりか屋」に関する研究

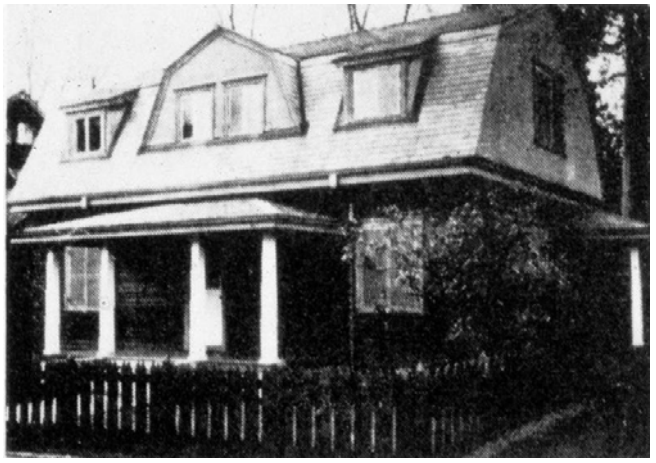
・「住宅改良会」の中心人物・橋口信助の興した住宅専門会社「あめりか屋」の沿革、事業内容について解明している。「あめりか屋」は、「住宅改良会」同様にアメリカ住宅の導入をめざしていた会社として知られつつも、その活動は「洋風化」として軽視され、その実体は不明なままだったのである。

『あめりか屋商品住宅ー「洋風住宅」開拓史』
（住まいの図書館出版局　1987年）

➡「あめりか屋」の住宅作品の特徴を、
＜西洋館の和風化＞と論じている。
「住宅改良会」のめざした住宅を具体的に推進していた存在が「あめりか屋」であり、西洋館を原型に伝統的住宅の要素を付加させることにより「洋風住宅」が誕生したとする新しい解釈の近代日本住宅史の歴史を論じている。

# 橋口信助::「あめりか屋」の創設者。アメリカ住宅の導入・定着を実践。

橋口は、明治42年アメリカから帰国し、アメリカ住宅の輸入販売を開始した。 →



『婦人之友』誌上で住宅に関する記事を発表し、注目される。 ↓

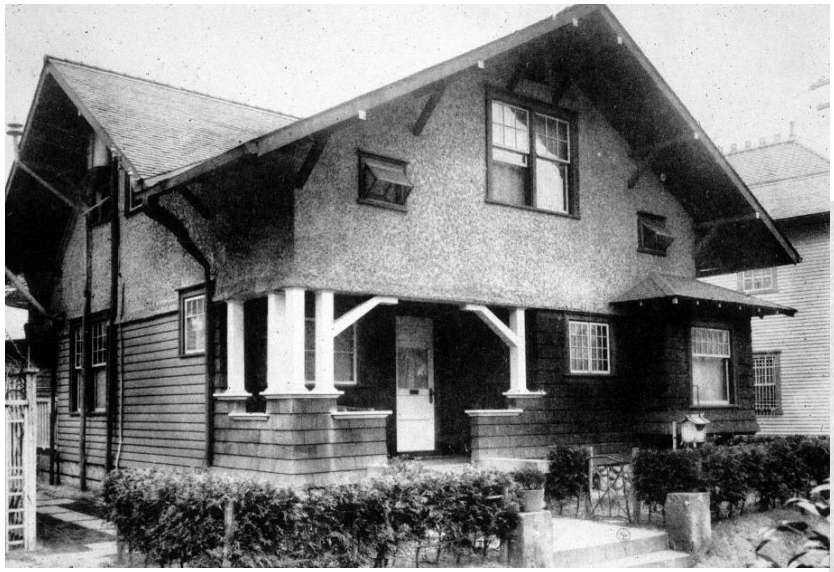
千五百圓で出來る
洋風の住宅

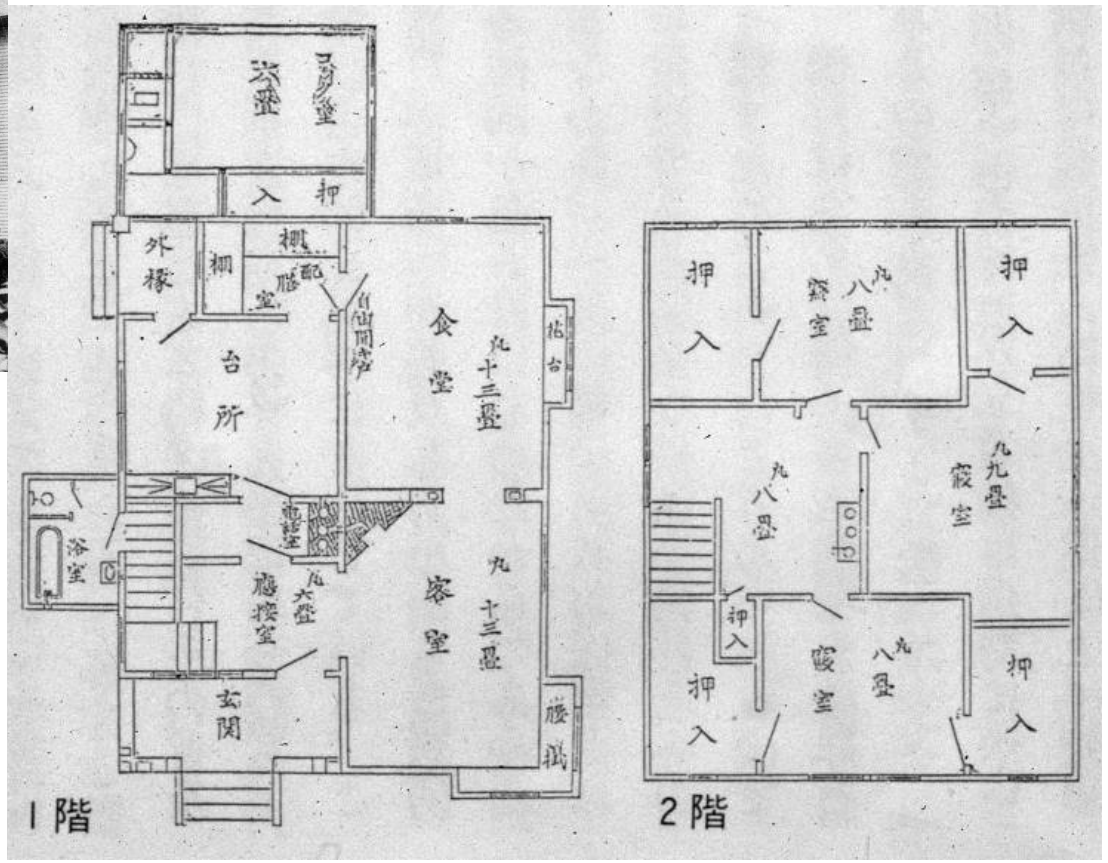
住宅別荘專攻
建築技師
橋口信助

## 住宅としての西洋建築

今日の如く住宅は日本風で、勤め先の官廳會社等は西洋風でありますと、入つては和服の日本風をなし出でゝは洋服の西洋風をなすといふ工合に、和洋兩樣の衣服を要する譯で、實に不便極まる次第で御座います。殊に婦人の服裝改良は久しい間の宿題でありまして、一般にその必要を認められるゝに拘らず、日本風の住宅に住んで居ては、到底これが改良は期せられません。此點から見ても、家屋の構造を改むるといふことは、今日の急務でありませう。且つ西洋館を日本家に比較すれば、第一掃除の手數も省け、召使の人數も減りますし、用心もまた堅固で、一家打揃うて外出する

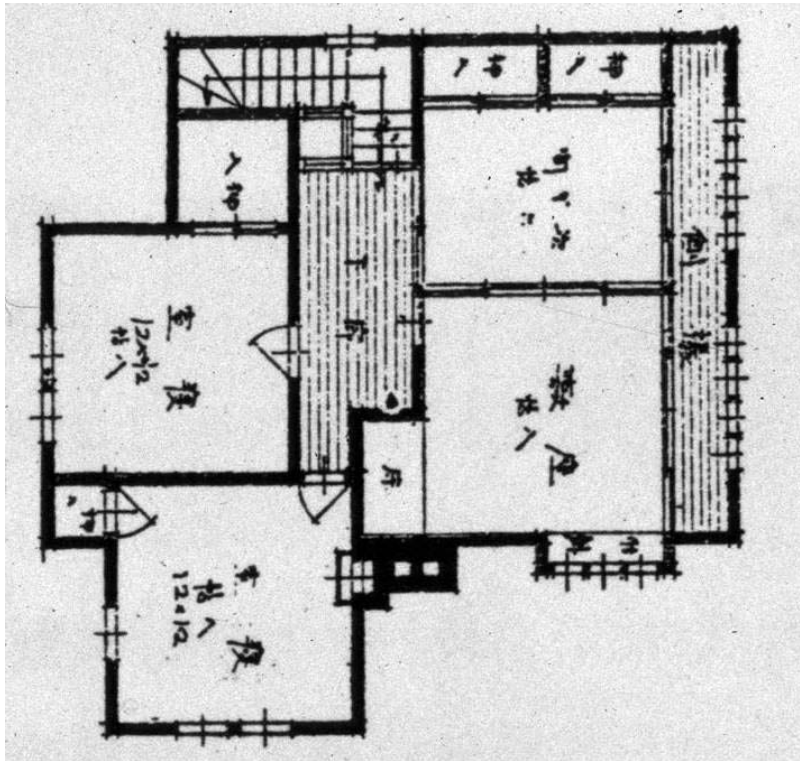
# ●「あめりか屋」の輸入住宅にみる
# ＜和風化＞の開始






◎初期の様相
基本平面は、そのままだが、
部分的に手が加えられた。
すなわち、①2階の寝室部には畳を持ち込む
②背後に和室の「コック室」を増築
➡＜和風の要素の導入＞という＜西洋館の和風化＞の開始

# ◎＜和風化＞の深化1



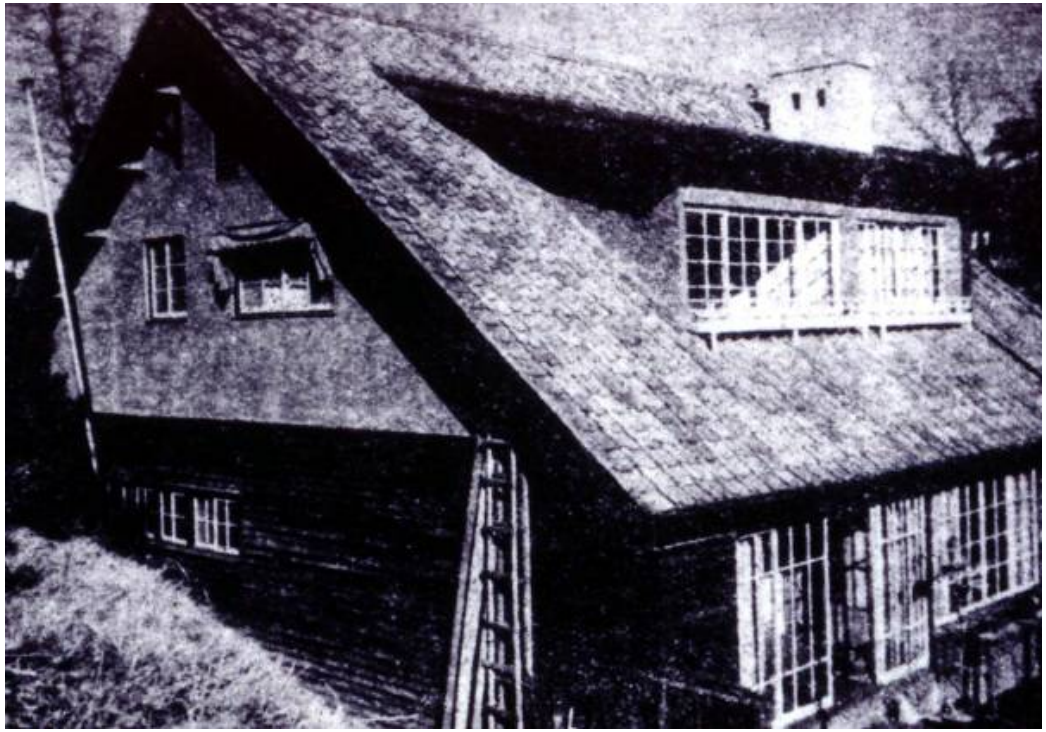
大正6年当時のあめりか屋の作品

2階の寝室部には、畳だけではなく、床の間や引違いの建具なども導入され、まさに「和室」が取り入れられている。ただ、外観はまだ純洋風の形式でまとめている

➡＜「和室」の導入＞という＜西洋館の和風化＞

# ◎＜和風化＞の深化2・「真壁造洋風住宅」の提案

大正10年、技師長の山本拙郎は、自邸を建設



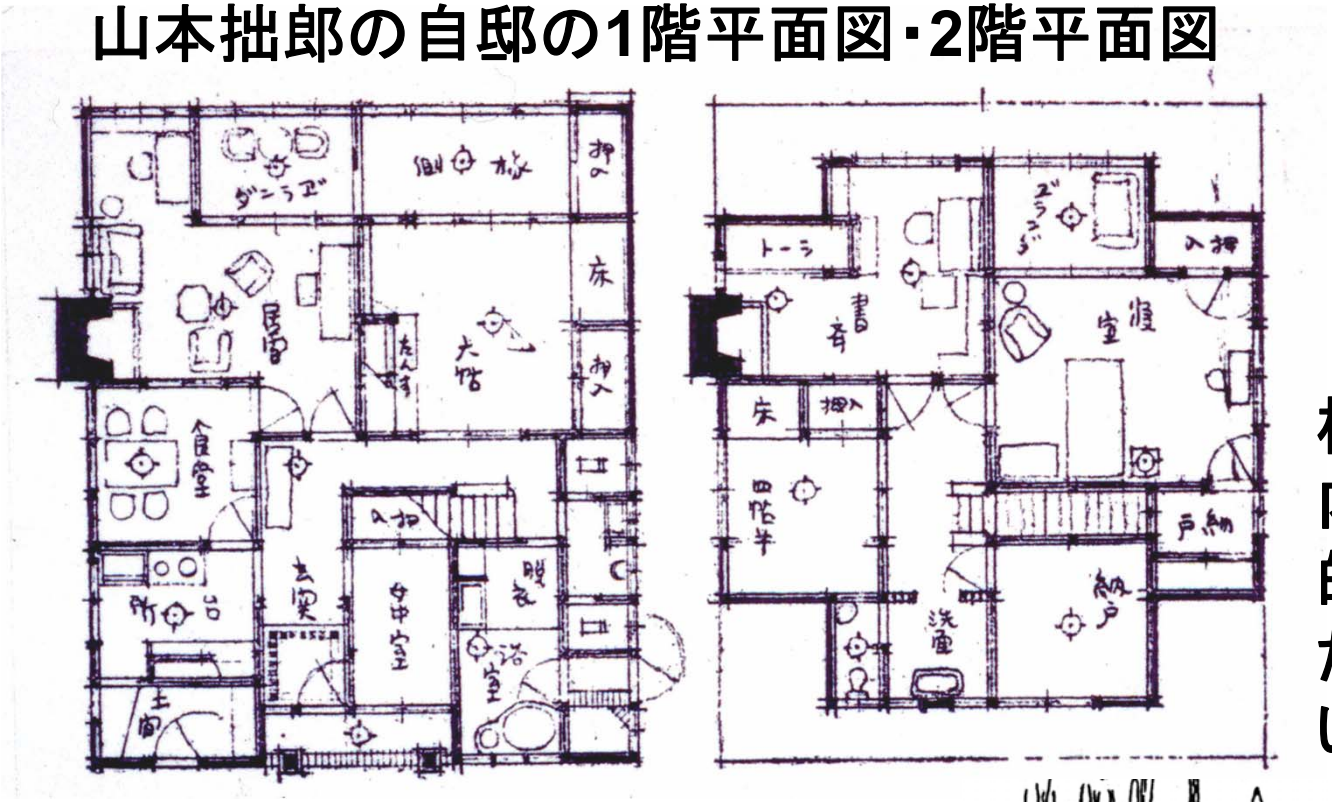
山本拙郎（1891-1944）
あめりか屋技師長

◎真壁造という在来工法による洋風住宅の提案（『住宅』T11年3月号）
（自邸ゆえ＜真壁造洋風住宅＞の実験的試みという側面を持っていた）

➡深化１：洋室=大壁で上げ下げ窓の板敷の部屋、和室=真壁で引き違い窓の畳敷きの部屋

深化２：真壁造洋風住宅：総ての部屋が真壁で、引違い窓、床だけが板敷きあるいは畳敷きとなる

## 山本拙郎の自邸の1階平面図・2階平面図



椅子座の部屋だが、内部の意匠は、伝統的な真壁構造によるため、柱が露出している。

起居様式は、部屋の機能や居住者の志向により、椅子座、床座を選択している。ただ、構造は在来の真壁構造で、開口部も引違い形式を採り入れており、外観も「純洋風」から「洋風」へと変化している。

➡＜真壁構造と引違い形式＞を基本とした＜洋風住宅＞へ

# ●橋口の輸入住宅事業の顛末

◎輸入住宅事業の開始の背景：アメリカで椅子座生活を体験し、便利で、世界的流れに適合していくために生活・住まいの欧米化をめざす

◎設計施工会社への移行

・住宅の輸入から、在来工法でデザインはアメリカ式のものへ移行。起居様式は二重生活批判を根拠に椅子座を求める。

＜西洋館の和風化＞の動きは、

初　期；；洋室のフローリングの上に畳を敷く。取り除けば洋室として利用可能

深化１；；「畳敷きの部屋」から「和室（畳敷き・真壁・引違いの開口部）」の導入へ

深化２；；構造形式を伝統的な真壁構造とし、開口部も引違い形式を採用

「あめりか屋」の手掛けた作品としては、「深化１」の段階の作品が一般化

なお、「あめりか屋」の作品分析に関しては、他に以下の論文がある。

「わが国戦前期の都市独立住宅における外部意匠の変容過程に関する一考察-「あめりか屋の住宅作品の外部意匠を中心に-」日本建築学会計画系論文集第599号，pp.181-188　2006年1月

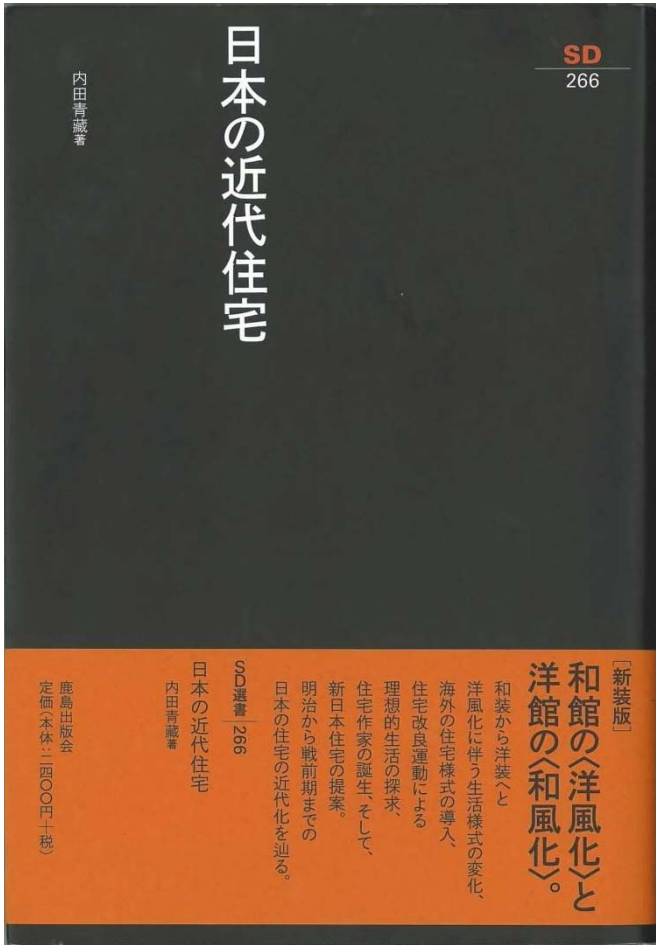
# 3. 近代日本住宅史研究の多様性を促した研究

## A:『日本の近代住宅』(鹿島出版会　1992年、新版　SD266　2016年)

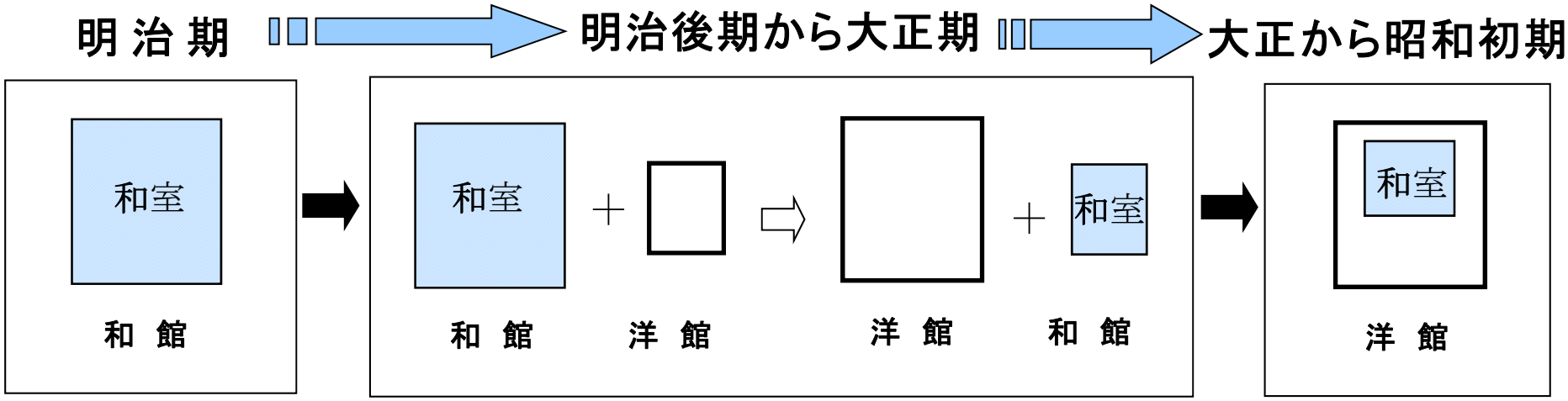
“洋風化”という観点から戦前期のわが国住宅界の動向を俯瞰した。

*和館の横に洋館を配置した和洋館並列型住宅*

日本住宅の“洋風化”の始まりを、明治初期に出現した上流層の「和洋館並列型住宅」とし、その変容過程、中流層の住宅への影響、“洋風化”を促した生活改善運動・住宅改良運動の動き、建築家の活動内容などを論じている。



# ◎「和洋館並列型住宅」から「洋館単独和室吸収型住宅」の変容過程

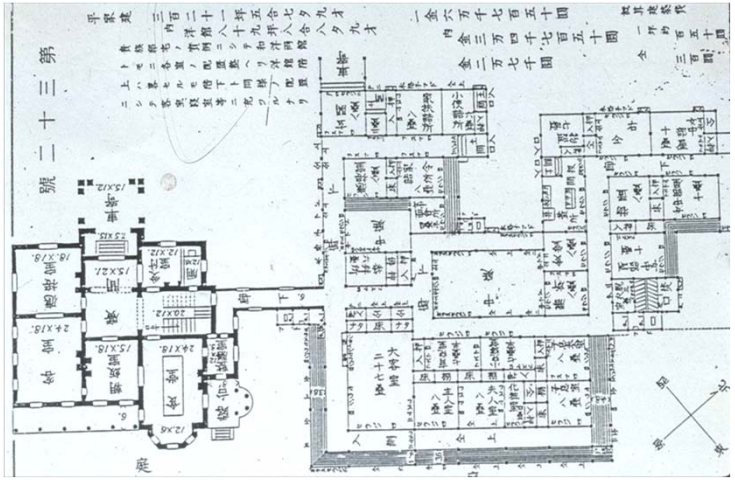


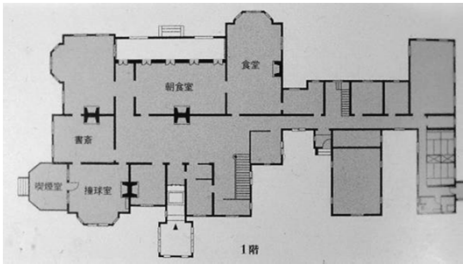

表：接客の場
奥：生活の場

和館：生活の場
洋館：接客の場

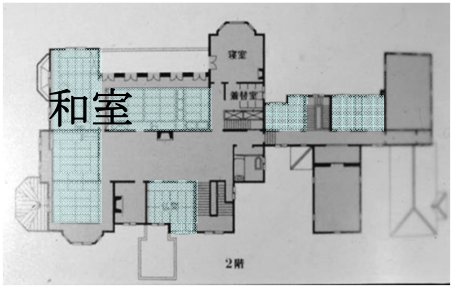
和館：接客の場
洋館：生活の場

1階：接客の場
2階：生活の場



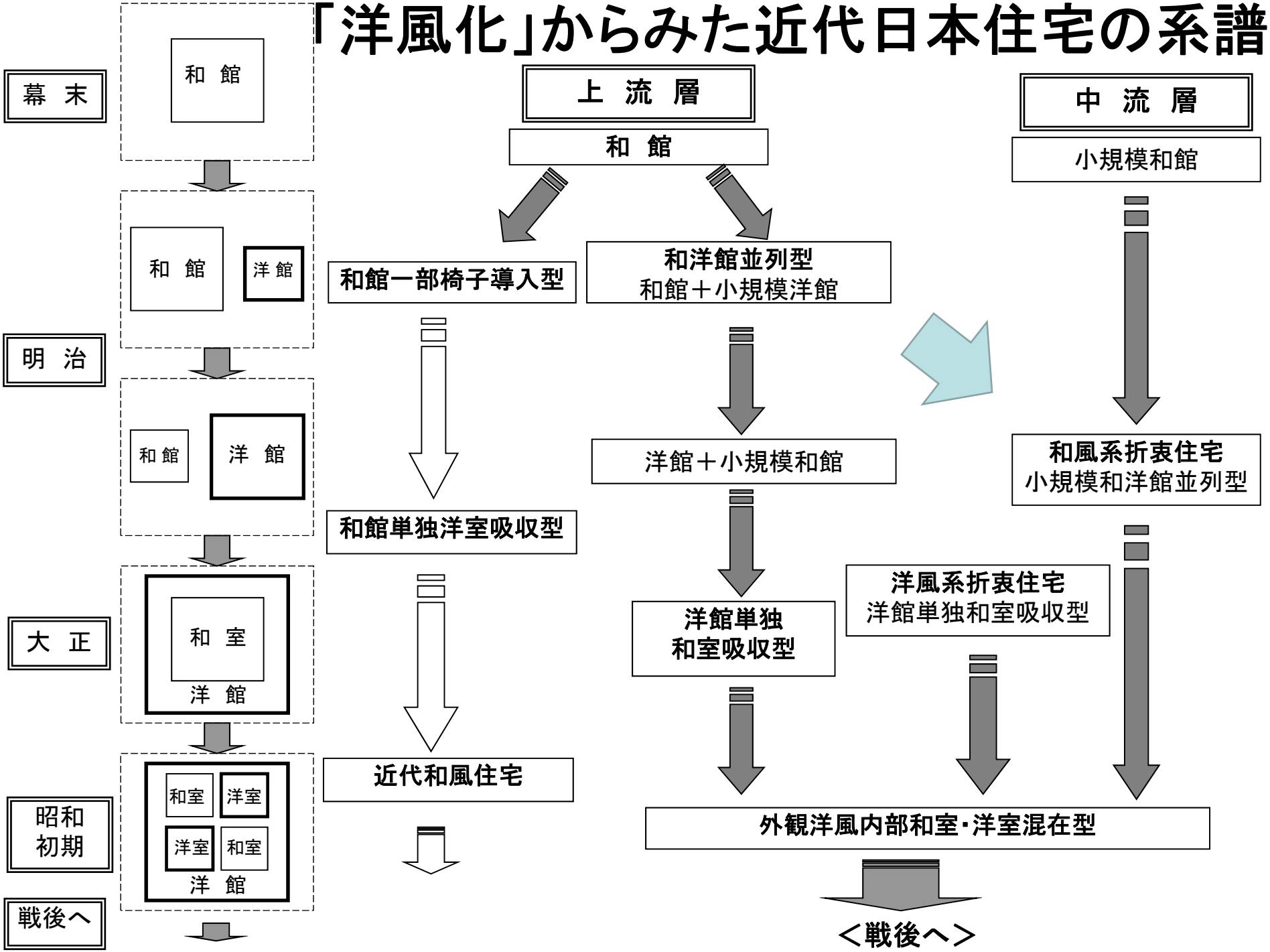


＜和館の代わりに和室が洋館に取り入れられる＞
➡日本住宅の“近代化”の動きを象徴的に示す動き




出典：内田青蔵『お屋敷拝見』／河出書房新社

# 「洋風化」からみた近代日本住宅の系譜



# ●近代日本住宅の「和」「洋」の混在化の動き

## ＜系譜図＞

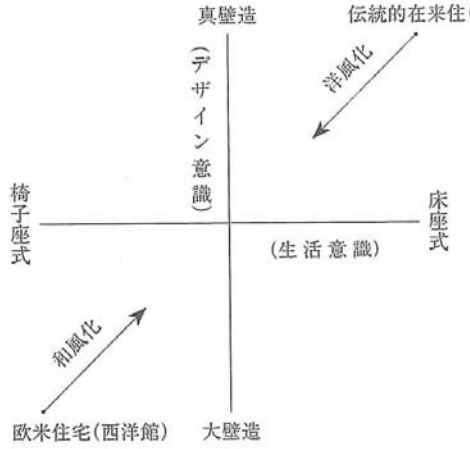
戦前期の住宅を、壁の仕様と起居様式を尺度として模式図化し、時間軸で並べたもの

⇨和館と洋館の並列型から、徐々に和洋の混在化が展開されている様子が見える。

## ＜わが国の住宅近代化の概念図＞

床座・椅子座（起居）の問題：＜生活意識＞と

真壁・大壁の問題　：＜デザイン・伝統意識＞




➡起居様式と壁仕様を1つの尺度として住宅の近代化の過程を捉えるための座標

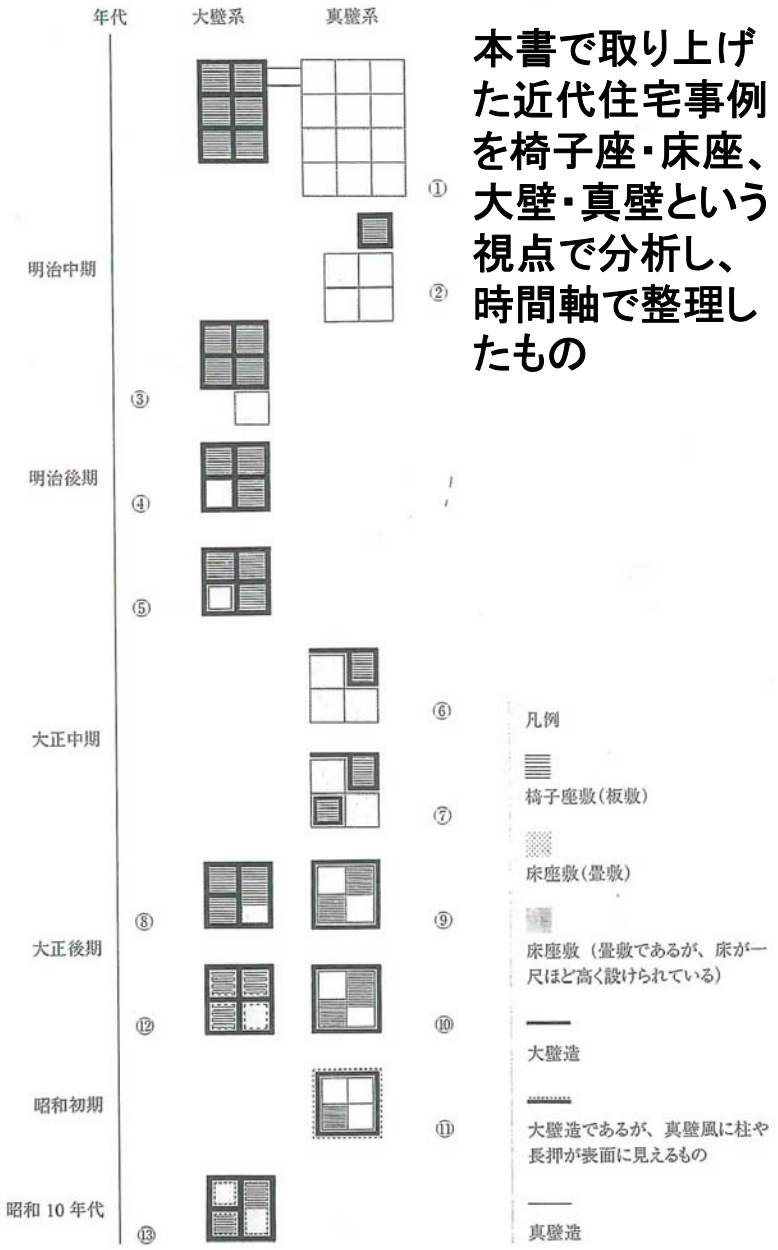



図1　系譜図

本書で取り上げた近代住宅事例を椅子座・床座、大壁・真壁という視点で分析し、時間軸で整理したもの

# B：近代日本住宅に関する多様な史的研究

## B−1；郊外住宅・郊外住宅地に関する研究

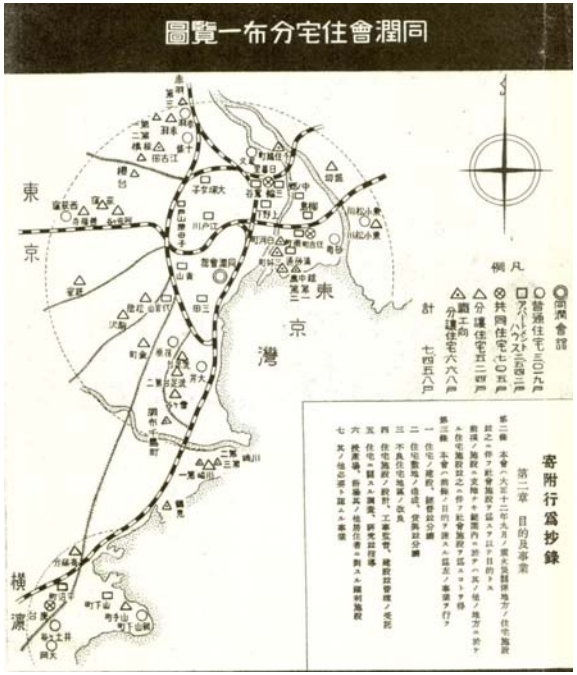
住宅の発展に伴う都市の拡大化の様相を捉えようとした研究。

・拙稿：「『城南田園住宅組合』住宅について」（山口廣編『郊外住宅地の系譜』 pp.207-220 鹿島出版会　1987年）

・拙稿：「ひばりが丘南澤学園町 『婦人之友』が生んだ学園町－自由学園を中心とした南澤学園町の成立」（片木篤・藤谷陽悦・角野幸博編『近代日本の郊外住宅地』pp.155-172 鹿島出版会　2000年）

・拙稿：「同潤会の郊外住宅地開発－普通住宅事業の候補地からみた旧東京市郊外の住宅地形成」（鈴木博之他編『近代とは何か』シリーズ都市・建築・歴史7pp.245-286　東京大学出版会　2005年）

城南住宅地の現状




同潤会の手掛けた住宅の分布図

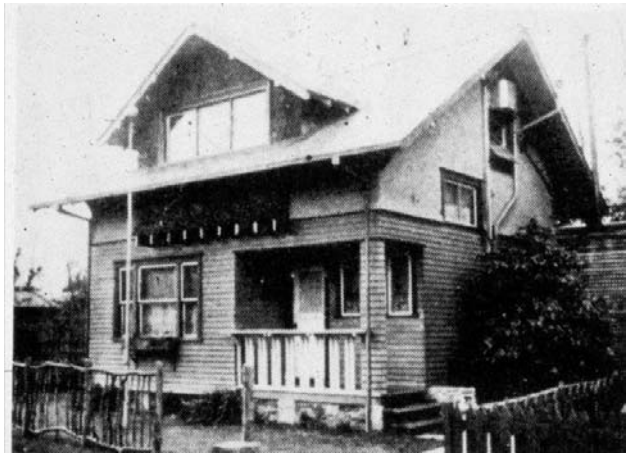
# B−2；アメリカ住宅の影響に関する研究

戦前期の“洋風化“のモデルとなったアメリカ住宅の導入の様相を明らかにしようとした研究。

・拙稿：「あめりか屋」店主橋口信助の輸入した「組立住宅」について　日本建築学会大会学術梗概集（関東）1988年10月

・拙稿：大正期における米国製組立住宅の導入について　日本建築学会大会学術梗概集（関東）1993年9月

大正9年に内藤氏が輸入したアメリカ住宅



明治42年橋口がアメリカから持ち帰った輸入住宅３例

# B−3；住宅作家・住宅論に関する研究

戦前期の住宅作家と称された、住宅建築をとりわけ重要視していた建築家たちの住宅論から、その理念を明らかにすることをめざした。

＜わが国の住宅作家草分けの3名＞

保岡勝也
（1877-1942）

山本拙郎
（1891-1944）

山田醇
（1884-1969）

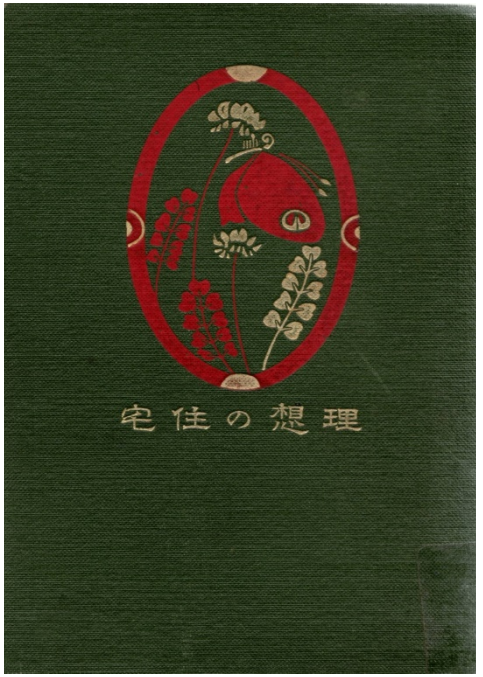
・拙稿:「住宅作家・山本拙郎の自由主義的住宅観について」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第5巻 pp.383-405　2009年　柏書房)

・拙稿:「“住宅作家”の先駆者・保岡勝也」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第9巻 pp.619-643　2010年　柏書房)

・拙稿:「健康的な“日本近代民家”の創出をめざした山田醇」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第18巻 pp.771-793　2011年　柏書房)

・拙稿:「わが国に持家を普及させようとした平尾善保の住宅論」(内田青蔵編『住宅建築文献集成』第27巻 pp.663-678　2013年　柏書房)

保岡勝也の代表的著作
大正4年




山田醇の代表的著作
昭和7年

# B-4；住宅各部に注目した史的研究

“洋風化”の動きは、同じ住宅の中でも、その各部の意味や役割などから様々である。こうした様相をもとに、“洋風化”の意味を再考することをめざしている。

・拙稿：「戦前期におけるキッチンセットの成立と展開－鈴木式高等炊事台を中心として」（日本生活学会編『台所の100年』pp.187-214 ドメス出版　1999年）

・拙稿：「ダイニングキッチン（DK）誕生前史－わが国戦前期の住宅にみられる台所と食事の場の一体化の過程に関する一考察」（日本生活学会編『台所の100年』pp.215-239　ドメス出版　1999年）

・拙稿：「『玄関』から見た明治以降の住宅の洋風化に関する一考察－戦前期刊行の建築系関連書籍を主資料として」（神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』NO.32 pp.255-287　2016年2月）

◎伝統的な蹲踞の姿勢から“洋風化”により立式へと変化し、諸設備も整えられる

◎大正11年当時の鈴木式炊事台

◎昭和2年当時の鈴木式炊事台

# B−5；その他

・拙稿：「建築学会の活動からみた大正11年開催の平和記念東京博覧会文化村に関する一考察」日本建築学会計画系論文集 第529号 pp.263-270　2000年3月

➡大正11年のわが国最初の実物住宅展は、「建築学会指導」とあるように建築学会の主導により実現した。

関連論文としては他に、「住宅展示場の原風景としての『文化村』」（西和夫編『建築史の回り舞台』pp.352-369　彰国社 1999年）がある。

・拙稿：「借家から持家へ－所有形態からみた戦前・戦後の住まいの変容」（日本生活学会編『住まいの100年』 pp.37-61 ドメス出版　2002年）

➡戦前と戦後の住宅の違いのひとつに借家から持家という所有形態の変化もある。

日本生活学会の編集の『住まいの100年』ドメス出版　2002年

大正11年の平和記念東京博覧会の文化村の看板

# ４．むすびにかえて

## -日本建築学会賞としての価値-

・内田の近代日本住宅史に関する一連の研究の概要を、根幹となる研究概要とその展開に分けて紹介して来た。

　すなわち、繰り返しになるが、独自の研究視点としては、「洋風化」と軽視されていた現象を主役とした新たな近代日本住宅史研究の展開であり、洋風化による生活の変化から住宅の変化（洋風化）を捉えるという住宅史研究の導入、といえるであろう。特に、近代住宅を洋風化による生活の変化から捉える視線は、生活学などの隣接する様々な研究領域との研究交流を可能とするもので、これまでの建築学固有の様式論の閉鎖性を取り去り、開かれた住宅史研究の可能性を切り開いたといえるであろう。そしてまた、こうした視点は、近代日本住宅史研究の発展と当該分野における学術的関心の普及に大きく寄与しており、日本建築学会賞にふさわしいものといえる。